

ジョン・ペッカム 『世界の永遠性に関する問題集』 第一 問題 試訳

著者	石田 隆太
雑誌名	古典古代学
巻	12
ページ	65-84
発行年	2020-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2241/00159641

ジョン・ペッカム『世界の永遠性に関する問題集』

第一問題 試訳

石田 隆太

凡例

- ・ 訳出にあたっては次のものを底本とした。

ETZKORN, G., SPETTMANN, H., OLIGER, L. ed. *Ioannis Pecham, Quaestiones disputatae*.
Grottaferrata (Roma): Editiones Collegii S. Bonaventurae ad Claras Aquas, 2002.

- ・ 『世界の永遠性に関する問題集』の現代語訳として参照できたものは次の通りである。

Potter 1993: Potter, V.G. *Questions concerning the Eternity of the World*. New York:
Fordham University Press. 【英語訳】

- ・ 註にて使用した略号の一覧は次の通りである（上で示したものは除く）。

Bianchi 1984: BIANCHI, L. *L'errore di Aristotele: La polemica contro l'eternità del mondo
nel XIII secolo*. Firenze: La Nuova Italia Editrice.

Brady 1974: BRADY, I. "John Pecham and the Background of Aquinas's *De aeternitate
mundi*." MAURER, A. ed. *St. Thomas Aquinas 1274–1974: Commemorative Studies*.
Vol. 2. Toronto: Pontifical Institute of Mediaeval Studies. 141–78.

Dales 1990: DALES, R.C. *Medieval Discussions of the Eternity of the World*. Leiden, New
York, København, Köln: E.J. Brill.

Dales & Argerami 1991: DALES, R.C. & ARGERAMI, O. ed. *Medieval Latin Texts on the
Eternity of the World*. Leiden, New York, København, Köln: E.J. Brill.

F: Codex. Firenze, Biblioteca nazionale, *Conv. soppr. J.I.3*, ff. 59c–61a.

Michon 2004: MICHON, C. *Thomas d'Aquin et la controverse sur l'Éternité du monde*.
Paris: GF Flammarion.

Wissink 1990: WISSINK, J.B.M. ed. *The Eternity of the World: In the Thought of Thomas
Aquinas and his Contemporaries*. Leiden, New York, København, Köln: E.J. Brill.

アウグスティヌス著作集：『アウグスティヌス著作集』。教文館，1979–。

アリストテレス全集新版：内山勝利，神崎繁，中畑正志＝監修。『アリストテレス
全集』。岩波書店，2013–。

アリストテレス全集旧版：出隆＝監修。『アリストテレス全集』。岩波書店，1968–
73。

キリスト教神秘主義著作集：『キリスト教神秘主義著作集』．教文館，1989-．
中世思想原典集成 I: 上智大学中世思想研究所＝監修．『中世思想原典集成』，平凡社，1992-2002．

トレル 2018: トレル, J.-P. 『トマス・アキナス 人と著作』．保井亮人＝訳．知泉書館．

- ・訳者自身による訳文中の [] は訳者による補いであり，〔 〕 は原語の引用である．
- ・指示語および指示語を含む語句に関しては，必要に応じて指示内容を明確化して訳出するよう心掛けた．
- ・底本にはしばしば（校訂とは無関係の）誤植と思われる箇所が見られるが，訳文は誤植を訂正したうえでのものである．

はじめに

西洋中世のスコラ学者ジョン・ペッカム (c.1230-1292) による『世界の永遠性に関する問題集』 (*Quaestiones de aeternitate mundi*) は，ペッカムがトマス・アキナスに対して『世界の永遠性について』 (*De aeternitate mundi*) を書かせるきっかけの一つを与えたことを示すものである¹．ジャン＝ピエール・トレルによる記述を引用しておこう．

ペッカムは，アブヴィルのゲラルドゥスとトマス・アキナスの面前での就任演説の際に，世界の永遠性に関するトマスの主張に対立する命題を激しく主張したようである．教授候補者を考慮して，トマスは沈黙を守っていた．しかし，儀式が終わるときに，憤慨したトマスの生徒たちが発言するようにトマスをせき立てた．それで，翌日，前日に説明した主張をペッカムが再検討した際，トマスは穏やかではあるが断固とした調子で，敵対者に見解の脆弱性を示した．この口頭による介入にとどまらず，トマスはすぐに『世界の永遠性について』を書いた．十中八九，この小著は口頭で展開したのと同じ議論を繰り返している．というのも，そこでトマスは一步一步ペッカムの論拠を論駁しているからである²．

世界の永遠性をめぐるスコラ学者たちの論争は既に多くの研究が対象としている³．それらの研究においてペッカムの立場が言及されることは多いが，彼の議論を単独で詳細に分析したものは見当たらない．Potter 1993 はおそらく，『世界の永遠性に関する問題集』を初めて全訳したものであるが，その後ペッカムのこの著作に特化した研究が続いているとは言い難い．原因の一つは，ラテン語原文の読みにくさに由来す

るだろう。『世界の永遠性に関する問題集』は、われわれに残されている限りでは二つの問題からなるが、その一方の第一問題を伝える写本はわずか一つ（つまり F）しかわれわれの手元にはない。しかも、第一問題の本文に限っても、しばしば破損や脱落が存在する。

しかしながら、ペッカムが与している立場は、世界の永遠性に好意的だと見なされていたアヴェロエス主義の立場や、世界に始まりがあるかどうか理性的には不可知だとするトマスの立場とも異なるものであり、思想的には同等の注目を浴びてもよいように思われる。ペッカムの立場は、端的に言うなら、世界に始まりがあることは理性的にも証明できるというものである。これについては、『世界の永遠性に関する問題集』の第二問題において詳細に議論されている。本稿では予備的な作業として、その前にある第一問題の試訳を示すことにした。この第一問題は、「或るものが無から順序だって造られたのか、ないし造られえたのか否か」を問題として提示し、ペッカムによる解答部分の前には 28 の異論と 5 の反対異論（ただし第 5 反対異論には途中で原文の破損がある）、さらに 25 の異論解答（ただし第 25 異論解答は 1 行目の途中から破損があり、それ以降も同様）がそれらに付け加えられる。この第一問題に対するペッカムの立場は、自身の解答（38）でも明言されているように、「時間の第一の瞬間においてあらゆるものが無から産出された」ことを認めるものである。議論の詳細な紹介については、以下の試訳の提示によって代えることにしたい。

試訳

第一問題

或るものが無から順序だって [ordinaliter] 造られたのか、ないし造られえたのか否かが問題とされる。

【異論】

1. そして、そうではないことが示される。その理由は以下の通りである。証言者ヒエロニムスによれば、「神は、あらゆることができるにもかかわらず、墮落した女をやはり処女にすることはできない」⁴。しかるに、存在者 [ens] の存在者に対する適合性の方が、非存在者の存在者に対するそれよりも大きい。したがって神は、もし墮落した女から処女を順序だって造ることができないなら、ましてなおさら、非存在者

から存在者を造ることもできない。—— [これに対しては] 次のように解答されていた。墮落〔*corruptio*〕は過去に移行している。そして、同じことが過去でありかつ過去でないことはありえない。それゆえ、神は墮落した女から処女を造ることはできない。

2. これ [すなわち、1の後半部分の解答] に反対する。同じ仕方で被造物の非存在は過去に移行している。それゆえ、同じ理由で、被造物の非存在に存在が継起することはありえない。

3. また、創造主の被造物に対する適合性の方が、非存在者の被造物に対する適合性よりも大きい。というのも、創造主と被造物の間には存在の類比〔*analogia entis*〕があるからである。しかるに、神は創造主から被造物を造ることはできない。というのも、創造主は不可變的で被造物は可變的だからである。それゆえ神は、ましてなおさら、創造主といかなる仕方によっても適合していない無から、存在を造ることはできない。

4. また、もし神が非存在者から存在者を造ることができるなら、非存在者の存在者に対する距離は無限であるがゆえに、無限の距離が通過されうる⁵。[だが] それは偽である。なぜなら、哲学者〔アリストテレス〕によれば、有限のものによっても無限のものによっても「無限は通過されえない」からである⁶。

5. また、神は、もしこの〔第四異論で言われた〕無限である距離に対してできることがあるなら、同じ理由で、他のいかなる距離に対してもできることがあることになる。その場合に神は、創造主と被造物の間にある距離の中でできることがある。というのも、一方の無限な距離は他方の無限な距離よりも大きいからである。

6. また、あらゆる能動は、物的なものどもにおけるように物的接触によるものであるか、靈的なものどもにおけるように力能的接触によるものであるかである。したがって、もし神が被造物を自らの力能の接触によって産出するなら、被造物は、接触されるよりも先に——私は本性的に「より先」ということを言っている——存在するか、存在するよりも先に接触される。もし第一の仕方だとしよう。しかるに、より先のものはより後のものからは原因されない。それゆえ、被造物は神の力能の接触によっては原因されない。他方で、もし被造物が、存在するよりも先に接触されるなら、これに反対する。文法学者たちによれば、あらゆる動詞はその知解において存在を内包しており、その存在に [何かを] 付加する。それゆえ、「それは接触する。それゆえ、それは接触するものとして存在する」や「それは接触される。それゆえ、それは接触されるものとして存在する」が帰結する。したがって、もし複合的なものよりも単純なものの方がより先であり、より後のものは他方のものに対する付加に基づくもので

あるなら、接触されるよりも存在することの方がより先であり、かくして上述のことになる。すなわち、存在そのものは神の力能の接触によっては原因されない。

7. また、もし被造物が存在し始めたなら、被造物がそれにおいて存在し始めた瞬間をわれわれは解することにして、それが a であるとする。さらに、もし被造物がより先に非存在を持っていたなら、神がそれにおいて〔被造物を〕意志していない或る瞬間をわれわれは解することにして、それが b であるとする。それゆえ、 a と b の間には、それらはより先とより後ということに即して存するがゆえに、時間があった。

8. もしあなたが、「より先」ということが永遠性の今であったと言うとするならどうか。——これに反対する。その場合、時間の始まりは、永遠性の後であったか、永遠性の今であったかである。しかるに、これは偽である。なぜなら、永遠性の今はあらゆる時間を包摂するからである。それゆえ、云々。

9. また、神は、本質の広大さ〔*immensitas*〕に即しては世界の大きさと対照されるし、自らの永遠性ないし持続の対照に即しては世界の持続と対照される。しかるに、大きさにおいて神は無限⁷であり世界は有限であるものの、神はやはり世界の外には存在しない。それゆえ神は、永遠性において無限であるものの、やはり世界の前には存在しなかった。

10. また、もし非存在が存在に先行するなら、〔第一に〕それは本性の先行性においてであることになるが、そうではない。なぜなら、「無」〔すなわち非存在〕は本性を意味せず、それゆえ、本性の順序も意味しないからである。あるいは〔第二に〕それは時間の先行性においてであることになるが、そうではない。なぜなら、時間はより先には存在しなかったからである。あるいは〔第三に〕それは永遠性の先行性においてであることになるが、そうではない。その理由は次の通りである。神の永遠性は神そのものである。しかるに、無そのものは神において存在しない。それゆえ、無そのものは神の永遠性においても存在しない。

11. また、肯定の方が否定よりも、所有の方が欠如よりも、存在の方が非存在よりも高貴である。しかるに、本性の存在は永遠性によっては計測されない。それゆえ、ましてなおさら、非存在も計測されない。

12. また、永遠性の今の方が時間の無限なる⁸今よりも単純である。それゆえ、もし、時間的瞬間の単純性のゆえに、時間の今においては被造物の存在も非存在も先行しなかったとするなら、ましてなおさら、永遠性の今においては、存在と非存在が同時に成り立つことはできない。しかるに、もし被造物の非存在が永遠性において〔既に〕存在していて、その後その存在が永遠性において存在するなら、対立するものが永遠性そのものにおいてある。それゆえ、ここにおいて或る基盤が措定されること、す

なわち存在が無から措定されることは不可能である。

13. また、もし或るものが無から造られたなら、それは同時に存在者でありかつ非存在者であった。証明は以下の通りである。本性においてのみ他方のものに先行するものは、そのものと同時に存在することができる。それは、本性において音は歌に先行するものの⁹、[歌と]同時に生成されるのと同様である。しかるに、もし被造物が或る時に非存在を持っていたなら、その非存在は本性においてのみその存在に先行した。それゆえ、云々。[もし被造物が或る時に非存在を持っていたなら、その非存在は本性においてのみその存在に先行したという]小前提の証明は次の通りである。それは、時間においてより先ではなかったし、永遠性においてもより先ではなかったことは確実である。なぜなら、そうだとすると、時間は永遠性の後に存在したであろうことが帰結するが、時間は永遠性と同時に存在するがゆえに、それは偽だからである。

14. また、もし被造物が[現在には]存在しかつ[過去には]存在しなかったのなら、さらにもし肯定と否定が同じものについてであるなら、同じ担い手[suppositum]は除去された存在[subtractum esse]である。そして、そのより先に除去されたものは純粹に非存在であった。かくして、存在と純粹な非存在は共通な或るものを持つ。

[だが]それは偽である。——[これに対しては]次のように解答されていた。それは理拠[ratio]に即して同じ共通のものである。

15. これ[すなわち、14の末尾]に反対する。事物に即して真であり固有であることには、存在するものは存在しなかったし、存在しなかったものが存在する。それゆえ、同じ共通のものがある。それゆえ、云々。

16. また、生じるものはすべて、生じるよりも前に生じることが可能であった¹⁰。それゆえ、もし或るものが無から創造されたなら、それはより先に創造されえた。しかるに、能力[potentia]は可能なもの[possibile]なしにはない。それゆえ、創造されるものは、創造されるよりも前に或るものであった。——[これに対しては]次のように解答されていた。それは創造主の能力においてのみのものであった。

17. これ[すなわち、16の末尾]に反対する。「永遠のものどもにおいては、存在することと可能であることは異なる¹¹」。なぜなら、全能が自らの行為に常に結合されているからである。それゆえ神は、時間の新しさに基づいてはいかなる行為も持たない¹²。

18. また、創造されうるということは理拠のうえでの能力のみを意味すると言われていたがゆえに、これに反対する。創造しうるということとは創造されうるということは相異なる基体に属する。なぜなら、創造しうるということは第一能動者[である神]に属し、創造されうるということは創造されうるものそのものに属するからである。

それゆえ、これら二つの能力は本質的に異なる。それゆえ、創造主と被造物が真に異なるのと同様にして、創造しうるということと創造されうるということは真に異なる。

19. また、このことは以下のようにして証明される。創造しうるということと創造されうるということが異なるのは、諸々の能力が原因として異なるからである。しかるに、創造しうるということは能動創造〔creatio actio〕に対して、創造されうるということは受動創造〔creatio passio〕に対して終極づけられる。それゆえ、能動創造と受動創造が本質的に異なるのと同様にして、それら二つの能力は本質的に異なる。それゆえ、もし或るものが創造されたなら、〔事物に即して〕真なる能力が先行した。〔だが〕それは創造に抵触する。それゆえ、云々。

20. また、創造は能動である。ところで、能動は、〔能動者が〕能動するところのもの〔quid agat〕ではなくて、それに対して〔能動者が〕能動するところのもの〔in quid agat〕を要求する。それゆえ、創造は質料を前提する。

21. また、神は原因の三つの類において、すなわち作出因、形相因、目的因において被造物の原因である。能動するために神は他の作出因を要しない。なぜなら神は、自らが無限な力能であり自らが自らの力能であって、また自分とは別のものによって能動しないからである。さらに、神は産出するために自分とは相異なる他の範型〔すなわち形相因〕を要しない。なぜなら、自らが本質的に範型だからである。また神は、他の目的を必要としない。なぜなら、自らが究極目的だからである。しかるに、もし範型が存在と本質的に異なっていたとするなら、それは産出するために自分とは相異なる他の範型を要したであろう。力能と目的についても同様である。それゆえ、第四の原因である質料は神とは徹底的に相異なるがゆえに、質料が前提されなければ神は能動することができない。

22. また、もし〔何かが〕非存在から存在へと引き出されるなら、それは、〔その何かが〕存在する時のことであるか、存在しない時のことであるかである。もし存在する時に引き出されるとしよう。しかるに、存在するものは〔非存在から存在への〕引き出しを必要とせず、〔そうした引き出しを〕必要としないものは引き出されない。それゆえ〔或るものは〕、存在する時には創造されない。

23. また、もし被造物が存在を受け取るなら、あるいはもし創造者が非創造者から生じるなら、それは創造者そのものの変化による。証明は次の通りである。それは被造物の変化によるものではない。なぜなら、創造は永遠の能動であるがゆえに、被造物が創造される前に神が創造するはずだからである。——〔これに対しては〕次のように解答されていた。創造は結果を含意する。——これに反対する。創造は創造者について言われること以外は何も含意しない。それゆえ、それは能動を含意するが受動

を含意しない。ところで、能動は能動の終極なしにはない。それゆえ、被造物の方が能動よりも先に存在する。——さらに、創造には二通りあり、それは能動創造と受動創造である。さて、受動創造は被造物にとって附帯性である。しかるに、いかなる附帯性もその基体よりも先には存在しない。それゆえ、受動創造が被造物に先行することは不可能である。しかるに、被造物が存在しうるのは、受動創造が本性の秩序において被造物に先行する場合のみであろう。というのも、受動創造は存在への道だからである。ところで、道は終極に先行する。それゆえ、云々。

24. また、創造されうるものの可能態の方が、数の可能態よりも現実態から離れている。なぜなら、創造されうるものの可能態は、実在的な現実態ないし可能態において何も意味しない一方で、数的なもの可能態は、それにおいて実在的な可能態が基礎づけられるところの或るものを意味するからである。しかるに、諸々の無限な種に対する数の可能態は現実態において引き出されえない。それゆえ、ましてなおさら、創造されうるものの可能態も現実態において引き出されえない。

25. また、質料はいかなる仕方によっても第一のものからは存在しえない。このことは次のように証明される。あらゆる能動者は、それが現実態においてあるということに即して能動するからである。

26. また、能動者は、種において自身に類似するものを意図して引き出す。さて、質料は徹底的に可能態における存在者である。ところで、神は現実態において十全な存在者である。それゆえ、質料は神と何らの適合性をも持たない。それゆえ、質料は神からは存在しえない。

27. また、諸々の被造物においては多数の欠落がある。したがって、それらが諸々の被造物においてあるのは、それらが無に由来するからであるか、質料のゆえにかである。もし第一の仕方なら、その場合にはあらゆる被造物が平等に諸々の欠落に満ち溢れている [plenus]。[だが]それは偽である。もし質料のゆえになら、質料は無から神によってあるものではない。あるいは、もし質料が無からのものであるなら、質料を分有するものなら何であれ、あらゆるものがやはり平等に諸々の欠落に満ち溢れていることになる。

28. また、もし或るものが創造されるなら、それは質料であるか形相であるか複合体であるかである。もしそれが複合体であるとしよう。——これに反対する。不可分の能動は可分的なものに対して終極づけられない。しかるに、創造は不可分の能動である。それゆえ、それは複合体に対しては終極づけられない。創造が不可分であるということ [つまり小前提] は明らかである。なぜなら、存在者と非存在者の間には中間が全くないがゆえに、創造は最高の単純性に属し不可分にある存在者へと終極づけ

られるからである。さらに、質料も創造されない。なぜなら、最も高貴な能動は最高度に下賤なものに対しては終極づけられないが、ところで質料は最高度に下賤なものだからである。さらに、質料も創造されないのであって、質料を前提する形相もない。それゆえ、云々。

【反対異論】

29. 以上に反対する。アヴィセンナ『形而上学』第6巻〔第1章〕によれば、「哲学者たちは能動者ということで、自然学者たちが知解するように変化の原理だけを知解するのではなくて、世界の創造主が存在するままに存在の原理および存在の創造主を知解する」。

30. また、原因がより先であればあるほど、それはより先に影響する¹³。それゆえ、第一原因は全体に影響する。

31. また、質料は、哲学者〔アリストテレス〕によれば、それに即して各々のものが存在しうるし存在しえないところのものである¹⁴。それゆえ、質料は非存在と多数の点で共通している。それゆえ、もし存在を与える形相が可産的〔productibilis〕であるなら、ましてなおさら、それから非存在が由来する質料も可産的である。しかるに、質料は質料から産出されない。なぜなら、その場合には無限に行くことがあることになってしまうからである。それゆえ、質料は無から産出される。

32. また、自らのうちの或るものに即して、すなわち自らの力能によって能動する能動者は、部分に即して再生産することができる。それは、種から種へと共通の基体がそれにおいて移行する生成によって生じるようにである。それゆえ、自らの全体に即して能動する能動者——自らの能動がそれに服している——は、事物をその本質全体に即して、すなわち質料と形相に即して産出する¹⁵。

33. また、神の能動は二通りある。すなわち内在的能動と外在的能動である。それゆえ、内在的産出が神の無限性を示すのと同様にして、外在的産出も神の無限な能力を明白にするはずである。しかるに、このことはただ…¹⁶。

【解答】

34. 創造は信仰箇条であり、何らの不信仰者にも決して十分には明らかにならなかった¹⁷。そのようなことから、何らかの人々は世界が神からは全くもって産出されなかったと措定した。それはアウグスティヌスが『神の国』第11巻第4章で語る通りであり、彼らに反対して曰く、「同じものに対して傾いている世界の諸部分の可動性および不可動性が、世界全体が同じ原理を持つものであることを宣言している」¹⁸。他の

人々はより悲惨な仕方で誤謬を犯している。この人々は、或るものが無から造られるということが理解できなかつたがゆえに、この世界は神の実体から造られたと措定した。これもまた同じ道によって反証される。実際、複数の箇所であウグスティヌスは、魂は神の実体から造られたものではないことを証明しており、それというのも魂は可變的なものだからである¹⁹。そしてそれゆえ、プラトン主義者のような他の人々は、先在する永遠で非被造の質料から世界は産出されたと措定した。それゆえ、『ヘクサエメロン』[第1巻第1章]であンブロシウス曰く、「プラトンは非被造で始まりのない三つのものを措定した。すなわち神と範型と質料である。ところで神は、質料の創造主としてではなくて[それを加工するだけの]職人[*artifex*]として措定された」²⁰。それゆえ、哲学者[アリストテレス]は「プラトンだけが世界を生成している」と言う²¹。

35. さて、これ[すなわち世界が先在する永遠で非被造の質料から産出されたとしたこと]が第一に反証される。その理由は次の通りである。各々のものは、より持続できるものであればあるほど、より善いものである。したがって、もし質料が他のあらゆるものよりも持続できるものであるなら、それは他のあらゆるものよりも善い。——また、事物の量は、力能の、しかも質料的な力能の尺度によって認識される²²。それゆえ、もし質料が無限な尺度を持つなら、無限な力能も持つが、それは不可能である。また、[サン=ヴィクトルの]リカルドゥスが『三位一体論』第5巻[第4章]で次のように証明する。父のペルソナが他のペルソナのためにあるのではないというまさにこのことによって、あらゆる他のペルソナおよび本性は父のペルソナに由来する。そしてリカルドゥスは次のように証明する。もし父のペルソナが自分で存在を持つなら、存在の分有に即して存在を持つのではない。そしてもし分有に即してでないなら、十全さに即してである²³。しかるに、本質および能力の十全さがあるところには、全くもって可能であること[*omnino posse*]が存在する。なぜなら、その可能であることは可能であることすべて[*omne posse*]だからである。それゆえ、可能であることすべてと存在することすべては、父のペルソナに由来する。——また、自体的な存在[*esse a se*]が原理の最も高貴な条件であり固有性であることは否定できない。それゆえ、もし質料が自体的に存在するなら、それは最も高貴な固有性において第一原理に適合する。

36. また、もし質料が非被造であるなら、それは単純であるか複合的であるかである。もし単純であるなら、複合体の部分が無から生じるのでない限り、それからは決して複合体は生じないであろう。他方で、もし複合的であるなら、あらゆる複合は単純な複合要素からなるがゆえに、質料の他の原因があることが必然であり、かくして

質料は自体的に存在するのではない。——また、[35 で] 既述のように、自体的な存在は優位さ〔*dignitas*〕の固有性と存在の高貴な現実態とを意味する。それゆえ、それはより優位な事物に適合する。しかるに、形相の方が質料よりも優位である。それゆえ、自体的な存在が形相に適合しないなら、質料にも適合しない。——また、[自らとは] 別のものが存在を放棄することの原因であるものは、存在そのものを自分では持たない。しかるに、反対するものどもの原因は反対的であるが、質料は存在することができないいずれのものにおいてもある。それゆえ、云々。

37. 他方で、諸事物の第一原理についてアリストテレスは、明白な意見を持たない。無論、力能は神にのみ由来すると言ってはいる²⁴。

38. したがって、これらの誤謬すべては、「始めに神は天と地を創造した」と聖書〔『創世記』第1章第1節〕が言っているのだから、信仰の宣言〔*professio*〕によって排除される。信仰のこの真理を世俗の賢者たちの誰もが十全には知解しなかった。なぜなら彼らは、その真理を否定したか、あるいは、それを被造物にも帰属させるようにして創造主に帰属させるアヴィセンナのように²⁵、誤って措定したからである。そしてそのようなわけで、これらの誤謬すべてが予め排除されるなら、時間の第一の瞬間においてあらゆるものが無から産出されたということが知られるべきである。

39. こうしたことの知解のためには、共通の基体を求める自然哲学者たちの想像力は隔離されるべきであり、可能な限りで、知性的追求へと上昇するべきである。したがって、あらゆるものが無から創造されたということは、創造主そのものの諸条件だけではなくて、被造物そのものの諸条件をも考察することで明らかである。

40. 第一に私は次のように言う。産出するものの側に立って、能力の量に注目することにしよう。その理由は次の通りである。能力がより力のあるものであればあるほど、それが自らの結果の産出に要する助けや態勢はより少なくなる。それゆえ、或るものを産出することに関して他のあらゆる能力を無限に超出する能力は、他の能力よりも無限に少ないものを要求する。しかるに、どんな存在者よりも無限に少ないものは、純粋な非存在者しかない。それゆえ、無限である限りでの無限な能力は、何であれ結果を純粋な非存在者から産出できる。それゆえ、『秘跡論』第1巻第1部第1章で [サン=ヴィクトルの] フーゴー曰く、「全能の言い尽くされえない力能は、造ることに際して [自らが] それによって助けられるであろうような、自らとは別のひとしく永遠なもの〔*coeternum*〕を持つことができなかった。それと同様にして、その力能が意志した場合、何を意志したか、いつ意志したか、そしてどれだけ意志したかが無から創造されるであろうということが自らの [支配] 下にあった」。

41. 第二に、この同じことが、諸事物を存在へと産出する仕方を考察することで明らかである。その理由は次の通りである。神は、自らの知性によって、自らの作用能力〔*potentia operativa*〕そのものである自らの御言葉によって能動するのであって、神において認識と作用能力は、あらゆる被造物においてそれらが異なるようには異なるらない。したがって、神の知性が同じ容易さによって諸々の存在者および非存在者を把握するのと同様にして、神の力能が同じ容易さによって或るものを存在者からも非存在者からも産出できるということは必然である。それゆえ、『告白』第11巻〔第7章〕でアウグスティヌス曰く、「あなたは、あなたが言うあらゆることを、あなたとひとしく永遠で永久なる御言葉によって言うのであるからして、あなたが言うことは何であれ、なすのとは別の仕方では生じるのではないでしょう」²⁶。

42. また、同じことが第三に、神の範型の完全性を考察することで明らかである。その理由は以下の通りである。神の諸完全性は、自らを被造物において表出することにおいて、諸々の被造物の範型である。したがって、あらゆる生物は生の理拠の下で神に由来し、神の生はあらゆる生の範型でさえあるのと同様にして、神における存在はあらゆる存在の範型である。——さらに、神の存在の方が、神の生よりも表出することにおいて全能的であるのだから、まして神の存在は、より全般的に自らを拡散する限り、原因することにおいて何らかの仕方でもより完全である。〔だが〕それにもかかわらず、そうしたことは神においてはいかなる段階も表示しない。それゆえ、『神名論』第5章でディオニュシオス曰く、「自らの実体および永劫が存在そのものではないようなものは何も、存立するもの〔*exsistens*〕ではない。したがって神は、他のすべてのものどもよりも主要なものとして、より適合的に存在である」。それゆえ存在は、神の他の諸完全性よりも表出する力を少なく持つのではない。「それは、神の他の諸々の賜物のうちでも神が、より優位なものに基づいて、存立するものとして讃えられるのと同様である」²⁷。したがって、神は純粹かつ完全な存在であるのだから、必然であることには、その自らの存在は別の任意の存在を表出するものであり、或る一つの生が非生物に生きることを与えるのと同様にして、或る一つの存在者は端的な非存在者に存在を与える。それゆえ、同じ章でディオニュシオス曰く、「神の他の諸々の分有以前には存在が差し出されており、それは神自身であって、それ自体で生の存在であるものよりも、自らに即してより年老いている〔*senex*〕」云々²⁸。

43. 引き合いに出された権威の箇所〔29〕でのアヴィセンナの意見も以上の通りである。さらに、彼は同書における他の箇所〔『形而上学』第6巻第2章〕で「創造は存在を与えるあらゆる仕方よりも優位である」と言う。

【異論解答】

44. 第1異論 [1] に対しては次のことが言われるべきである。神は、それ自体において可能であり自らの完全性に抵触しないものを何であれすることができる。ところで、その場合、それにおいて矛盾が内蔵されるところのものは理性とは疎遠となるのであり、それは矛盾の内蔵がある場合と同様である。例えば、附帯的に不可能なものすべてにおいてはそうである。実際、そうした不可能性とは、食べている者が腹をすかせている者になるようなことであり、それは、墮落した者が墮落していない者になるようなことと同様である。したがって、墮落は過去に移行しているのだから、神はそれを造られなかったことにすることはできない。そのようなわけで、墮落した女を処女にすることは矛盾を内蔵する²⁹。

45. 第2異論 [2] に対しては次のことが言われるべきである。類似は存在しない。なぜなら、処女であることが墮落した女であることを排除するのと同様には、被造物の存在は存在していなかったことを排除しないからである。

46. 第3異論 [3] に対しては次のことが言われるべきである。「創造主の被造物に対する適合性の方が、非存在者の被造物に対する適合性よりも大きい」と言われる場合、対照が濫用的である。その理由は次の通りである。被造物を神と対照させる場合には、神の観点では諸々の極 [すなわち被造物と神] があるが、被造物を無と対照させる場合には、たった一つの極 [すなわち被造物] しかなく、それらの一方 [すなわち無] は、変化の両極どちらにとってもあらゆる可能性を欠いたものである。[それに対して] 被造物はそうではない。なぜなら、無においては可能性がないが、被造物の存在はただ可能的であるのみだからである。

47. 第4異論 [4] に対しては次のことが言われるべきである。実際のところ、存在者と非存在者の間には距離はない。なぜなら、たった一つの極 [すなわち存在者] しかないからである。そしてそれゆえ、固有には通過されない。なぜなら、諸々の極が、同じ最上位のものをめぐって互いに共起していたり随伴していたりしないからである。

48. 第5異論 [5] に対しては次のことが言われるべきである。明らかのように、創造主と被造物の間には距離はない。また、創造主と被造物の間の距離の極は、始まりおよび終わりのあらゆる可能性を欠いている。

49. 第6異論 [6] に対しては次のことが言われるべきである。それはこうした特定の産出におけることである。なぜなら接触は、自らの接触において接触されるものの原因だからである。それゆえ、接触そのものが存在を与えるがゆえに、接触の方が接触される事物そのものよりも本性においてより先に存在する。——他方で、接触されるということは接触されるものとして存在するということであり、接触されるものと

して存在するという事は存在するという事に対して付加しているがゆえに、接触されるということは存在するという事よりも後なるものであるという異論に対して、私は次のように解答する。接触されるということが存在するという事に対して事物に即して付加するのは、それ[すなわち何らかの接触主体]から接触されていること、ないし諸事物の自然な行程において接触されていることが存在よりも後なるものであるという限りでのことである。なぜなら、それは存在に対して事物に即して付加しているからである。だが、目下のところでは、語りの仕方に即して付加している。なぜなら、付加されるものは、順序においても基体の諸原理からは原因されないし、基体にも随伴しないし、むしろ創造のように本性的に先行するからである。

50. 第7異論[7]に対して私は次のように短く解答する³⁰。そうしたことごとにおいて、あらゆる否定命題は認められるべきであるが、いかなる肯定命題も容認されるべきではない。実際、被造物は瞬間においてでなければ存在しなかったという命題は真である一方で、「その非存在がより先に存在した」という命題は偽である。なぜなら、このことによっては、時間とは区別されるより先とより後に即した尺度が措定されるがゆえに、永遠性のあり方によってより先なる瞬間は何らも与えられるべきではないからであり、それは、世界の外には場所——すなわち世界がある所——が与えられていないのと同様である。しかしながら、神の偉大さは世界の収容力を超越する。永遠性の下にあるものどもがそうであるのと同様にして、時間とともに存在しかつ常に存在するより先なるものもそうである³¹。それゆえ、時間の第一の今と、常に存在した永遠性の今との間には、中間的なものは何も入り込まない。——それゆえ、世界は始まったのであってより先には存在しなかったということを私は認める。そして「その非存在がその存在よりも先に存在した」という命題を私は否定する。なぜならこれは、時間とは区別されるより先とより後に即した尺度を措定するからである。それゆえ、「世界は常に存在した」という命題は認められうる。それゆえ、『神の国』第12巻第15章でアウグスティヌス曰く、「諸天使は、仮に常に存在していたとしても、創造されたものである。だが、このことによって、仮に常に存在していたなら、それゆえに諸天使は創造主とひとしく永遠であるというわけではない。というのも、創造主は不易の永遠性によって常に存在したが、諸天使は造られたからであって、諸天使が常に存在したと言われるのは、あらゆる時間において存在したからである」³²。

51. 第9異論[9]に対しては次のことが言われるべきである。神が世界の外に存在しないのは、「～の外に」が位置の次元を意味する限りでのことである。ただし、神は力能の広大さによっても世界の外には存在しない。なぜなら、神は世界を含み持っており、世界によってともに制限されないからである。以上と同様にして、神は世界の

前には存在しなかった。ただし、それは延長に即してではなくて単純な永遠性に即してである。それゆえ、『神の国』第12巻第15章でアウグスティヌス曰く、「もし神が常に主であったなら、神は、自らの支配に仕える、無から造られたが神とひとしく永遠ではない被造物を常に持っていた。というのも神は、被造物なしにはいかなる時間においても無いものの、被造物よりも前に存在していたからであり、しかも、[時間の]広がりにおいて被造物の先を走る者としてではなくて、永續性が続く限りで先行する者として存在していたからである」³³。以上がアウグスティヌスのものである。したがって、神は次元の延長なしに先行したのであり、それは、次元なしにはともに制限されない世界を神が超越するようにしてである。——さらに、『神の国』第11巻第15章でアウグスティヌス曰く、「もし彼らが、世界の外にはいかなる場所も存在しないがゆえに、諸々の場所を無限なものとして想像している思考が空しいものであると言うなら、彼らに対してはそのようにして解答される。すなわち、いかなる時間も世界の前には存在しないがゆえに、神の休暇〔*vacatio Dei*〕に属する諸々の過去の時間があると思慮することは人間たちが空しくやっていることである」³⁴。

52. 第10異論[10]に対して私は次のように言う。非存在は存在に先行しなかった。というのも私は、何も措定しない諸々の否定命題を認めるが、延長、あるいは、時間の瞬間という観点での先行性に即して順序づけられた延長の持続を措定する肯定命題すべてを否定するからである。

53. 第11異論[11]に対して私は次のように言う。異論は真なることを結論づけている。なぜなら、非存在はあらゆる尺度を欠いているからである。

54. 第12異論[12]に対して私は次のように解答する。「世界の非存在は永遠性の今において存在した」ということは偽である。なぜなら、純粋な非存在に対してはいかなる尺度もない一方で、被造物の存在は時間においてあるからである。——だがもし、非存在が永遠性の今において存在したということをあなたが全体としては言いたいのなら、それは[時間的]瞬間の単純性と同じではない。その理由は次の通りである。[時間的]瞬間の単純性は、僅少さ〔*paucitas*〕ないし狭小さ〔*arctatio*〕の単純性に属するがゆえに、複数のものを包摂しえない。他方で、永遠性の今の単純性は僅少さに属してはおらず、むしろ広大な多数性に属している。それゆえそれはあらゆる時間を包摂する。——何らかの人々が他の仕方で言うことには、それは帰結しない。なぜなら、非存在は永遠性によって無媒介に計測される一方で、存在は媒介的に計測されるからである。だが、そこには何もない。なぜなら、永遠性に対してより無媒介的であるがゆえに、非存在の方が存在よりも高貴であるだろうからである。

55. 第13異論[13]に対して私は次のように言う。「より先」がどんな仕方で言わ

れるにせよ、「世界の非存在の方が世界の存在よりも先に存在した」という命題は偽である。他方で、「世界の存在がより先には存在しなかった」という命題は真である。その理由は次の通りである。より先に触れられたように、「世界の非存在がより先に存在しなかった」と言う際には、時間という観点でより先とより後を必然的に持つ尺度が〔述定において〕繋げられている。なぜなら、ここでの話題は延長の先行性についてであるのだから、時間という観点でより先を持つ尺度はすべて、それより後なる或るものを持つからである。

56. 第14異論〔14〕に対しては次のことが言われるべきである。肯定と否定が同じものについてであるのは、その同じものが存在者ではなくて、知性によって把捉されたものである限りでのことである。実際、知性によって把捉される限りでの事物は、その存在ないし非存在なしに把捉されるからである。というのも、それは自らの存在ではないからである。それゆえ、或るものが〔肯定と否定の〕両方に共通であるのは、事物に即してではなくて、知性に関してである。あるいは、理拠に即してであっても、やはり存在者としてではなくて、知性によって把捉されうるものとしてである。——かくして、第15異論〔15〕に対しても明らかである。

57. 第16異論〔16〕に対しては次のことが言われるべきである。「生じるものはすべて、生じることが可能であった」と言う際、私は次のことを区別する。もしそれが自然の行程に即してであるとするなら、自然の行程に即して生じることが可能である。それに対して、もしそれが自然の行程を超えるものであるとするなら、超自然的な能力によって、すなわち創造主の能力によって生じることが可能であった。その能力は、内在的なものどもに関しては行為と常に結合されているが、外在的なものどもに関しては、それは最小限である。

58. 第17異論〔17〕に対しては既に明らかである。なぜなら、「永遠のものどもにおいては、存在することと可能であることは異ならない」ということは、内的行為については真で、外的行為については偽だからである。

59. 第18異論〔18〕に対しては次のことが言われるべきである。或るものに関して〔何かが〕可能だと固有に言われるのは、そのものにおいてある能力に即してである。しかしながら、或る者が〔別の〕或るものに対してすることができるという意味では、或ることが或る者にとって可能だと広義に言われる。それゆえ、創造されうるということが創造しうるということとは別の能力に属すると言う際、もし創造されうるということが固有に、すなわち創造されうる基体に属する可能なことだと言われるとするなら、それは真であるが、その場合、創造されうるということは何ものでもない。他方でもし、創造主が創造されうるものに対してすることができるという意味で、創造

されうるということが理拠に即して言われるとするなら、その場合、創造されうるといふことと創造しうるといふことは同じである。ところで、創造されうるといふことが創造主については言われないうとされていることは、語りの仕方に関しては真であるものの、事物に即しては創造主について言われているであろう。

60. 第19異論 [19] に対しては次のことが言われるべきである。諸々の能力が終極として異なるのは、真理に即して相異なる能力がある時である。だが目下のところでは、自然に供される神の能力は一つであり、相異なる結果はその一つの能力から存在しうる。

61. 第20異論 [20] に対しては次のことが言われるべきである。創造することは能動することではなくて、造ることである。それゆえ、『三位一体論』第5巻第11章でアウグスティヌス曰く、「だが、造ることに関わることは、ただ神についてのみ、最も真に言われる」³⁵。したがって造ることは、[能動者が] それに対して能動するところのものを要求しない。——他方で、哲学者 [アリストテレス] は能動することと造ることについて別の仕方語っている³⁶。その際に彼は、それらの目的が作用そのものにおいてあるところのものどもを行為に関するものども [actilia] と呼んでいる。それは琴を弾くという行為や徳の行いにおいてある通りであるが、それらのうちの何ものも、なされた後には残らない。[それに対して、] 建築に関するものどもやそれに類似したものどものように、作用の後にとどまるものどもが制作に関するものども [factilia] である。それゆえ、哲学者 [アリストテレス] が言うことには、思慮は真なる理拠によって行動的な性向であるのに対して、技術は真なる理拠によって制作的な性向である³⁷。——さらに、これらについて他には、『律法の敵対者に対する反駁』第15章でアウグスティヌスは語っている。曰く、「造ることとは、全くもって存在していなかったものを造ることである一方で、創造することは、既に存在していたものから或るものを秩序づけて設立することである。そしてそれゆえ、神は諸悪を創造する者だと言われている」³⁸。

62. 第21異論 [21] に対しては次のことが言われるべきである。全くもって不完全性に属し、神にはいかなる仕方によっても入り込みえない質料因についてと、他の諸原因についてとは別々のことである。

63. 第22異論 [22] に対しては次のことが言われるべきである。引き出されたものは、存在していた時に引き出されていた。なぜならそれは、引き出されていたのと同時に引き出されているからである。そして、「存在していたものは創造主を要しない」と言われる際、これは、存在の受け取りの後に存在するものについては真であるが、存在と創造を同時に受け取るものについては真ではない。

64. 第 23 異論 [23] に対しては次のことが言われるべきである。能動創造は、神の内在的な能動だけではなくて、被造物と同時に存在する共同〔communicatio〕が含意する外的な結果との神の結合をも意味する。——能動は能動の終極なしにはないという反論に対しては、次のことが言われるべきである。それは真である。ただし、能動されることの全原因である神の能動においてと、他の諸々の能動においてとは別々の仕方である。

65. 第 24 異論 [24] に対しては次のことが言われるべきである。創造されうるものの可能態についてと数の可能態についてとは、可能態の基体という理拠によっても終極という理拠によっても、類似はない。なぜなら、創造されうるものの可能態は創造するものにおいてあるのだからであり、『ウォルシアヌス宛書簡』[『書簡 137』第 2 章第 8 節] でのアウグスティヌスによる「諸々の可變的事物においては、造るものの能力が造られるものの全理拠である」という箇所を通りである。さらに、終極という理拠によっても類似がないのは、創造されうるものは純粹現実態に対して秩序づけられる一方で、数の可能態は、或る一つの数が他の数への道であるがゆえに、可能態と混合した現実態に対して秩序づけられるからである。

66. 第 25 異論 [25] に対しては言われるべき…³⁹。 ⁴⁰

¹ トレル 2018: 316–22; Brady 1974.

² トレル 2018: 319.

³ Michon 2004; Dales & Argerami 1991; Dales 1990; Wissink 1990; Bianchi 1984.

⁴ ヒエロニムス『書簡 22 (エウストキウム宛)』第 5 節「私は思い切って申します。神にはすべてが可能であるにもかかわらず、処女がくずおれた後では、彼女を助け起こすことはできない、と。神は、確かに、墮落した処女を罰から解放することはできますが、彼女に栄冠を授けることはできません」(中世思想原典集成 I.4: 676)。Cf. トマス・アキナス『神学大全』第 1 部第 25 問題第 4 項反対異論。

⁵ Cf. トマス・アキナス『神学大全』第 1 部第 45 問題第 2 項第 4 異論。

⁶ アリストテレス『分析論後書』第 1 卷第 3 章 72b10–11「無際限な事柄を辿るのは不可能である」(アリストテレス全集新版 2: 349); 『形而上学』第 11 卷第 10 章 1066a35–b1「無限なものは、そのものがもともと〔その本性上〕行き過ぎられないものであることのゆえに通りに過ぎられることの不可能なもの(あたかも音声が不可視なもの〔見られることの不可能なもの〕であると言われるような意味で)であるか、あるいはその通り過ぎの完了されることのない、またはほとんど通り過ぎられることのないものであるか、あるいはもともとは通り過ぎられうるものであるが、通り過ぎられない、または限界のないものである」(アリストテレス全集旧版 12: 387)。

⁷ F のように、《infinitas》を《infinitus》と読む。

⁸ Potter 1993 (3) や Brady 1974 (157) とは異なり、底本は《infinitem》の前に《in》を補っているが、その補足をここでは採用しない。

⁹ Cf. アウグスティヌス『告白』第 12 卷第 29 章第 40 節。写本では《sonus》の部分が脱落しているため、Brady 1974 (157n6) 以来、《sonus》を補う読みが継承されている。

¹⁰ Cf. トマス・アクィナス『神学大全』第1部第45問題第2項第3異論。

¹¹ アリストテレス『自然学』第3巻第4章203b30。

¹² このままだと、当該の問題に対する異論を提出するという論旨にそぐわないためか、英訳者はこのラテン語原文がおそらく間違っていることを指摘している (Potter 1993: 4n1)。

¹³ Cf. 『原因論』第1命題；ボナヴェントゥラ『「命題集」註解』第2巻第1区分第1部第1項第1問題第1基礎。

¹⁴ アリストテレス『形而上学』第8巻第1章1042a25–28「感覚的な実体はすべて質料をもっている。ところで、基体は実体であるが、或る意味では質料が基体である（ここに「質料」というのは、私の言う意味では、現実的にはこれ〔と指し示されうる個体〕ではないが、可能的にはこれであるところのものごとである）」(アリストテレス全集旧版12: 271)。

¹⁵ Cf. ボナヴェントゥラ『「命題集」註解』第2巻第1区分第1部第1項第1問題第3基礎。

¹⁶ 以下、Fにおいては3行ほどの脱落がある。

¹⁷ Cf. ボナヴェントゥラ『「命題集」註解』第2巻第1区分第1部第1項第1問題解答；トマス・アクィナス『神学大全』第1部第46問題第2項解答。

¹⁸ アウグスティヌス『神の国』第11巻第4章第2節「たとえ預言者の声が聞かれなかったとしても、宇宙そのものはいわば沈黙の中に、かぎりなく整えられた運動変化と、また見られるかぎりのもっとも美しい形姿とをもって、自分は造られたものであると叫び、自分はまた、見えず言い表わしがたく偉大な神、かつ見えず言い表わしがたく美しい神によるのでなければ生じえなかったと叫んでいるからである」(アウグスティヌス著作集13: 27)。

¹⁹ Cf. アウグスティヌス『「創世記」逐語註解』第7巻第2章第3節および第3章第5節；『律法と預言者たちの敵対者に対する反駁』第1巻第14章第21–22節；ペトルス・ロンバルドゥス『命題集』第2巻第17区分第1章第5節。

²⁰ Cf. ペトルス・ロンバルドゥス『命題集』第2巻第1区分第1章第2節。

²¹ アリストテレス『自然学』第8巻第1章251b17–19「時間を生成するものと考えているのは、唯一プラトンのみである。なぜなら、時間は天界と存否を共にするが、その天界は生成したものだ、と彼は主張するからである」(アリストテレス全集新版4: 377)。

²² この部分は、ラテン語テキストに何らかの問題があることが底本でも Potter 1993 (9n3) でも指摘されている。

²³ Cf. ジョン・ペッカム『「命題集」註解』第1巻第27区分第1問題第1項 (cod. Flor. Bibl. Naz. Conv. Soppr. G.4.854, f. 80vb) 「したがって、父の第一性 [primitas] は非生誕性 [innascibilitas] によって表示される。そして、非生誕的であるというまさにそのことによって、父は何ものにも由来しないがゆえに、他のあらゆるもの、他のあらゆる事物は何であれ父に由来するということが帰結するのであり、それはリカルドゥスが『三位一体論』第5巻第4章で教える通りである」。

²⁴ アリストテレス『ニコマコス倫理学』第1巻第9章1099b9–11「幸福がもたらされるのは、学びによるのか、習慣づけによるのか、またそれ以外の仕方での訓練によるのか、それとも何らかの神的な配分によるものか、あるいは偶然によるものか」(アリストテレス全集新版15: 46)。

²⁵ アヴィセンナ『形而上学』第9巻第4章。

²⁶ アウグスティヌス『告白』第11巻第7章「あなたはあなたと等しく永遠なる言葉によって、あなたが語るすべてのことを同時に永遠に語ります。そしてあなたが、在るように、と語ると何であれ、生じます。あなたは語ることによってのみ、創ります。しかしあなたが語ることによって創るすべてのものは、あなたと等しくなく、また永遠でもありません」(アウグスティヌス著作集5.2: 214)。

²⁷ 偽ディオニュシオス『神名論』第5章第5節「存在するすべてのものにおいて、その存在と永遠性が「在ること自体」でないものはない。そこで他のすべてに優る根源的名称として、神は適切にも「在るもの」として讃えられる。それは他のすべてに優る賜物に由来する名前である」(キリスト教神秘主義著作集1: 211)。

²⁸ 偽ディオニュシオス『神名論』第5章第5節「存在を分有する他のものに先立って、「在ること」が先存在者から産み出される。すなわち「自らに即して在ること自体」は、生命自体であること、知恵自体であること、神聖な類似自体であることなどに優っている」(キリスト教神秘主義著

作集 1: 211).

²⁹ Cf. トマス・アクィナス『神学大全』第 1 部第 25 問題第 4 項解答 ; 『第 5 任意討論集』第 2 問題第 1 項.

³⁰ この異論解答は、おそらく第 8 異論に対する解答も兼ねている.

³¹ Potter 1993 (13n4) も言うように、この部分はラテン語テキストにかなりの破損が見られる.

³² アウグスティヌス『神の国』第 12 巻第 16 章第 2 節「天使たちは常に存在したとしても被造物として造られたのであり、常に存在したことからしてただちに創造者と等しく永遠であることにはならないのである。創造者は不変の永遠性にしたがって存在したが、天使たちは造られたのである。彼らが常に存在したと言われるのは、彼らがあらゆる時に存在し、彼らが存在しなかったならば時間はまったく存在しえなかったからである」(アウグスティヌス著作集 13.3: 127).

³³ アウグスティヌス『神の国』第 12 巻第 16 章第 3 節「神は常に主であったし、常にその支配に仕える被造物を持っていたのであるが、その被造物は神から生まれ [ママ——引用者註] のではなくて、神によって無から造られたのであり、そのようなものとして神と等しく永遠であるのではない。神は被造物より先にあったが、そこには被造物はなかったのであるから、時間の中にあったのではない。神が被造物に先立つのは、時間の広がりの中でその向こうにあるのではなく、不断の持続によって先立つのである」(アウグスティヌス著作集 13.3: 128).

³⁴ アウグスティヌス『神の国』第 11 巻第 15 章「それゆえ、この宇宙以外にはどんな場所もないのだから、無限の諸空間を想像するような人間の思考は空しいものだと言うべきである。そうだとすれば同様に、この宇宙以前にはどんな時間もないのだから、神の活動を欠く以前の諸時間を考えることは空しい人間のなすことだ、とあの連中に対して答えるべきである」(アウグスティヌス著作集 13.3: 32).

³⁵ アウグスティヌス『三位一体論』第 5 巻第 8 章第 9 節「しかし、能動に関することはおそらく神にのみ、もっとも真なる意味で言われるだろう」(アウグスティヌス著作集 28: 178).

³⁶ アリストテレス『ニコマコス倫理学』第 6 巻第 4 章 1140a1–23.

³⁷ アリストテレス『ニコマコス倫理学』第 6 巻第 4 章 1140a9–10; 第 7 章 1141b21.

³⁸ アウグスティヌス『律法と預言者たちの敵対者に対する反駁』第 1 巻第 23 章第 48 節. Cf. トマス・アクィナス『神学大全』第 1 部第 45 問題第 1 項第 1 異論 ; 『イザヤ書』第 45 章第 6–7 節.

³⁹ 以下、F においては 12 行の脱落がある.

⁴⁰ 本稿は、JSPS 科研費 17J00136 および 18K12191 の助成を受けたものである。また末筆ながら、草稿に対して有益な指摘を与えてくれた小沢隆之氏に感謝したい。